

日本語の教材として、ことわざを見る

筑波大学名誉教授 林 四郎 1999年夏 第12回日本語教育連絡会議 於ライデン大学日韓学センター

I. 日本語基幹文型



II. 基幹文型の見地から、ことわざ(ことわざ的短句を含む)の表現形式を調べる

単述文

[判断文]

AB判断文

【AはB。】

<属性言い当て>子はかすがいい。子は三界の首かせ。子供は風の子。口は禍の門。火事は江戸の花。旅の恥はかき捨て。朝起きは三文の得。親の光は七光。人は見かけによらぬもの。逃がした魚は大きい。

<転換成り代わり>短気は損気。多芸は無芸。合わせ物は離れ物。はやり物はすたり物。兄弟は他人の始まり。嘘つきは泥棒の始まり。昨日の敵は今日の友。会うは別るの始め。釣り合わぬは不縁のもと。時は金なり。継続は力なり。

<判定落着>親に似ぬ子は鬼子。蛙の子は蛙。蛇の道は蛇。餅は餅屋。

<等価交換>浪速の芦は伊勢の浜荻。

<描写>一寸先は闇。

【AがB。】

<ずばり言い当て>言わぬが花。見ぬうちが花。待つ間か花。知らぬが仏。逃げるが勝ち。負けるが勝ち。始めが大事。一事が万事。思い立ったが吉日。ならぬ堪忍するが堪忍。金の切れ目が縁の切れ目。

【AもB。】

<拡張解釈・強弁>嘘も方便。あばたもえくぼ。腹も身の内。枯れ木も山のにぎわい。

<限度極端>人の噂も七十五日。仏の顔も三度。地獄の沙汰も金次第。蓼食う虫も好きずき。弘法も筆の誤り。

(亜種) 比較による隠れAB判断文

【AよりB。】⇒【B(こそ)がX。】

<AよりBが よい/大事だ>花より団子。氏より育ち。亀の甲より年の功。遠い親戚より近くの他人。明日の百より今五十。田舎の学問より京の昼寝。うちの鯛より隣の鰯。*この型の隠れ「案ずるより生むが易い。」

象鼻判断文

【AはBがC。】

<Aの焦点Bにあり>女は髪が命。芸能人は歯が命。人は陰が大事。亭主丈夫で居ぬがよい。風呂と客とは立つ

がよい。口と財布は締めるが得。女房と畳は新しいのが良い。

<A=B+C>小姑は鬼千匹。灯台もと暗し。あわてる乞食はもらいが少ない。蛇の道は蛇が知る。朝雨蓑要らず。

[存在文]

存在肯定文

【Aがある。】

<ドコにナニがある>残り物に福がある。京に田舎あり。親しき仲に礼儀あり。

<ナニはドレダケある>二度ある事は三度ある。

存在否定文

【Aは無い。】馬鹿につける薬は無い。稼ぐに追いつく貧乏無し。

【AにBは無い。】さわらぬ神にたたり無し。月夜に大風無し。

【AはBが無い。】嘘と坊主の頭はいったことがない。女三界に家無し。

[現象文]

ナル現象文

【Aはドウナル。】

<ナニはドウナル>出る杭は打たれる。明日は明日の風が吹く。あとは野となれ山となれ。流れる水は腐らぬ。水は方円の器に従う。猿も木から落ちる。

<ナニはドウナラナイ>後悔先に立たず。無い袖は振れない。山より大きい猪は出ない。

<ドコにナニはドウナラナイ>火の無い所に煙は立たぬ。瓜の蔓になすびはならぬ。人の口に戸は立てられぬ。

【Aがドウナル。】嫁が姑になる。笑う門には福来^{来る}る。

【ドウナル。】

<口から水がドナル>=<ドウナル>上手の手から水が漏れる。足元から鳥が立つ。

<ドウナレ>習うより慣れる。

スル現象文

【AがBをドウスル。】目糞鼻糞を笑う。門前の小僧習わぬ経を読む。芸は身を助ける。色の白いは七難かくす。溺れる者は藁をも掴む。勧学院の雀は蒙求を囀る。

【ドウスル。】

<ナニでナニをドウスル>えびで鯛を釣る。瓢箪で鯰を押さえる。真綿で首を締める。

<ナニをナニでドウスル>恩を仇で返す。大根を正宗で切る。

<ナニにナニをドウスル>綿に針を包む。敵に塩を送る。川に水を運ぶ。我が田へ水を引く。

<ナニをドウスル>赤子の手をひねる。秋茄子は嫁に食わずな。

<ドコからナニをドウスル>葎の髓から天のぞく。

<ナニをドウシロ>詩を作るより田を作れ。

複述文

[連結文]

一般連結文

【後句=判断文】桃栗三年、柿八年。沈黙は金、雄弁は銀。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。楽は苦の種、苦は楽の種。刀は武士の魂、鏡は女の魂。

【後句=連想的判断文】旅は道連れ、世は情け。人は一代、名は末代。鬼は外、福は内。牛は牛連れ、馬は馬連れ。女は愛嬌、男は度胸。親子は一世、夫婦は二世。昔は昔、今は今。鬼も十八、番茶も出ばな。

【後句=存在文】瓜に爪あり、爪に爪無し。腹に一物、背中に荷物。

【後句=ナル現象文】雨降って地固まる。船頭多くして船山に上る。

【三句連結、最後句=連想的判断文】一富士、二鷹、三なすび。

単頭連結文

【後句=ナル現象文】女賢しうして牛売り損なう。

潜在単頭連結文

【後句=判断文】帯に短し褌に長し。

【後句=ナル現象文】一を聞いて十を知る。庇を貸して母家を取られる。角を矯めて牛を殺す。藪をつついて蛇を出す。

【後句=スル現象文】盗人を捕えて縄をなう。負うた子に教えられて浅瀬を渡る。餅食って火にあたる。石橋を叩いて渡る。石橋を叩いて渡らない。頭隠して尻隠さず。

【後句=スル現象文命令形】損して得取れ。人の振り見て我が振り直せ。七度探して人を疑え。人を見て法を説け。馬には乗ってみよ、人には添ってみよ。

重層連結文

【最終後句=1点文】

<内部も連結構造>聞いて、極楽；見て、地獄。無くて、七癖；有って、四十八癖。

<内部は条件構造>立てば、芍薬；座れば、牡丹。勝てば、官軍；負ければ、賊軍。

【最終後句=判断文】他人恐ろし、闇夜はこわい；親と月夜はいつも良い。

[条件文]

一般条件文

【帰結句=1点文】住めば都。三人よれば文殊の知恵。待てば甘露の日和。

【帰結句=判断文】坊主憎けりゃ袈裟まで憎い。

【帰結句=存在文】捨てる神あれば拾う神あり。泣く子もあれば笑う子もある。子を捨てる藪は有っても身を捨てる藪は無い。田があれば畠がある。

【帰結句=ナル現象文】無理が通れば道理引っ込む。噂をすれば影がさす。所変われば品変わる。水清ければ魚住まず。あちら立てればこちらが立たぬ。一人口は食えなくても二人口は食える。親は無くとも子は育つ。二十後家は立てども三十後家は立たぬ。喉元過ぎれば熱さを忘れる。

【帰結句=スル現象文】来年のことを言えば鬼が笑う。狂人走れば不狂人も走る。権兵衛が種まきゃ烏がほじくる。笛吹けども踊らず。

【帰結句=省略形】犬が西向きゃ尾は東。

単頭条件文

【帰結句=判断文】腐っても鯛は鯛。山椒は粒でもびりっと辛い。

【帰結句=ナル現象文】犬も歩けば棒に当る。塵も積もれば山となる。

【帰結句=省略形】武士は食わねど高楊子。

潜在単頭条件文

【帰結句=ナル現象文】貧すれば鈍する。朱に交われれば赤くなる。三日乞食をすればやめられぬ。

【帰結句=スル現象文】ああ言えばこう言う。

【帰結句=スル現象文命令形】急かば回れ。人を見たら泥棒と思え。粉糰三合持ったら養子に行くな。鳥は食ってもどりは食うな。鶏口となるとも牛後となることなかれ。

【帰結句=省略形】寄らば大樹の陰。人を呪わば穴二つ。

重層条件文

【最終帰結句＝スル現象文】

<条件句の内部が連結構造>座して、食らえば；山をも崩す。

III. 扱いに問題の残るもの

1. 【名詞1点文のこと】ことわざには、以下の例のように「AのB」という形を取るものがかなり多い。

河童の川流れ。ひいきの引き倒し。紺屋の白袴。貧者の一灯。ごまめの歯ざしり。論語読みの論語知らず。年寄りの冷水。鬼の霍乱。怪我の功名。どん栗の背比べ。馬鹿の一つ覚え。ミイラ取りのミイラ。下手の横好き。狐の嫁入り。千慮の一失。悪女の深情。安物買いの銭失い。鶴の一声。老いの繰り言。引かれ者の小唄。下衆のかんぐり。猿の尻笑い。後家の頑張り。盲の垣覗き。武士の一言。馬鹿の三杯汁。馬鹿の大足。一文惜しみの銭失い。金時の火事見舞い。隣の甚太味噌。武家の商法。とどのつまり。時の氏神。うどの大木。総領の甚六。同じ穴のむじな。鳥無き里のこうもり。転ばぬ先の杖。金の卵。九牛の一毛。泥中の蓮。鶴の一声。鰻の寝床。取らぬ狸の皮算用。縁の下の力持ち。三度目の正直。

これらは、形としては名詞句の1点文ゆえ、そう扱えばいいのだが、一つ一つを内容本意に見ると、

河童の川流れ = 河童が川で流れる ⇒ ナル現象文

ひいきの引き倒し = ひいきが引き倒す ⇒ スル現象文

ミイラ取りのミイラ = ミイラ取りがミイラになる ⇒ ナル現象文

猿の尻笑い = 猿が(他の猿の)尻を笑う ⇒ スル現象文

盲の垣覗き = 盲が垣から覗く ⇒ スル現象文

というような構造を持っていて、それが分かっていなければ、各ことわざの意味も分からないことになる。こういう類のものを、「金の卵」や「時の氏神」のように、単純な連体修飾関係で固まっている名詞句と、同じに扱っていいものかどうか、問題である。しかしまた、上記のように還元して扱ったら、各ことわざがこの形で世にあることの意味が無くなる。どう扱うべきか、結論は、まだ出せない。

2. 【省略形のこと】ことわざでは、自ずと無駄な言葉が省かれて、極度に縮約した形になることが多い。上にAB判断文の亜種として「比較による隠れAB判断文」という1類を設け、「花より団子。」のような形を属させた。そこには、当然、表現の省略があった。比較という行為は価値意識があってこそ生ずることだから、「AよりB」という比較の姿勢が、「よい」「大事」「頼りになる」のような言葉呼び起こしている。であれば、それは、表現面に出すよりも、口ずさむ人の心に描かせた方が効果的である。そのコースが目に見えるものの1例として「隠れ」の項を設けてみた。このような「隠れ」類型は、他にも幾つも数えられるはずだが、今それを適切に立てることができないので、問題提起にとどめる。省略が有効に働いていることは分かるが、そこに潜んでいる言葉を、類として定めがたい(個別には定められても)ものとして、以下のような例を掲げておく。

【AにB。】青菜に塩。泣き面に蜂。寝耳に水。馬の耳に念仏。猫に小判。糠に釘。豆腐にかすがい。柳に風。釈迦に説法。焼け石に水。蛙の面に小便。鬼に金棒。泥棒に追い銭。弱り目にたたり目。臭い物に蓋。両手に花。割れ鍋にとじ蓋。東男に京女。嬬天下にからっ風。提灯に釣り鐘。一人娘に婿八人。多勢に無勢。

【AからB。】棚からぼた餅。藪から棒。窓から槍。二階から目薬。瓢箪から駒。

IV. ことわざと言語教育・日本語教育

ことわざは、国語教育の中では重んじられている。それは、ことわざが、日本人の考え方・感じ方・生き方を歴史的に示すと考えられるからである。同じ理由で、日本語教育では、ことわざは、あまり重んじられないと思う。それは、歴史的である故に、因習的でもあって、例えば「長いものには巻かれろ」というような退嬰的な教えを、日本語学習中の外国人に示したくないと思う、そういう面がたくさんあるからである。

だが、ことわざには、そういう内容的価値のほかにも、言語形式の面から見た時の価値がある。それが、測り知れぬほど大きいのではないかと、最近、私は気付いたのである。いつ気付いたか。私の捉えている日本語基幹文型を必要最小限の形で示すサンプルを、誰もが知っている 有名文句で整えられないかと考え、そういう文句をあこれと搜しているうちに、どうやら、ことわざがそれに当るのではないかと思ひ始めた。それで、意図的にことわざを基幹文型に配置してみたら、大変見事に各形式を満たすことを知った。ここにお見せしている、基幹文型別ことわざ表が、その作業結果である。

ここに示したことわざの数はまだまだ少ない。もっと大規模に集める必要がある。また、基幹文型にうまくはまらないことわざを、もっと組織的に説明する必要がある。それらの作業は、今後のことに属する。

ディスコースの活動をするには、発話の目的、対話の相手、話に盛り込む大小の話題とその展開順序、話の筋となる論理の構成、声の出し方、話の長さ、態度表情との関係、その他いろいろ、意図して組み上げなければならないことがあるので、ディスコースの教育には、意図性・意識性のもが多いと思うが、その基礎に、一回一回の発話を支えるセンテンスが文法的に受け入れられる形をしていなければならないということがある。文法的な文が発話できるためには、文法操作が無意識に行われるようになることが必要だ。初めには、文法を意識して合法的な文を作る段階があり、いわゆる文法教育が必要であることは言うまでもないが、それと並行して、文法行動を無意識化する訓練が必要であることも、論を待たぬ。そのために、ミシガン方式等のパンプラクティスがあることも明らかだ。それにもう一つ加えて、ことわざや、それに類する有名文句を使って、基幹的な文型を身につけさせる方法があるだろうと思う。現に、日本のことわざは、私たち日本人に、その内容で生き方を教えるとともに、その形式で、無意識レベルでの日本文法を教えてくれたのだと思う。その道を日本語教育にも整えたいと希望している。

【ヒント例】

〔例文〕三四郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じていた。(漱石『三四郎』より)

この文は、私の「単頭条件文」に属するから、諺の「山椒は粒でもびりっと辛い」や「塵も積もれば山となる」がそのサンプルとなる。

